ピアニストの健康エッセイ・17

演奏時の顔

ピアニストが演奏中の表情をご覧になったことはありますか。
所々で目を見開いたり眉を動かしたり、口をパクパクさせながら弾いていたり・・・それはもう千差万別です。
作曲者になりきって演奏するからそのような顔になるのかと言えば、そうとも言い切れません。
意外かもしれませんが、演奏時に作曲者の気持ちになりきるという人はあまり聞いたことがありません。それは下手をすると勝手な陶酔となりがちだからです。自分の個人的な思いを曲にぶつけすぎるのも同様です。
クラシック音楽において、ヨーロッパでは様式や曲の構造の理解を深めたうえでの、美意識を重視しています。
その上で独自の解釈や適度な感情表現で色づけることにより、個性を出すという感じでしょうか。
演奏者が過度に感情移入しすぎてしまうと、曲の本質が崩れてしまい危険です。
とはいえ、日本においては音楽に「魂」や「精神性」を重視する傾向があります。歌謡曲の歌手が涙を流しながら、または感極まってかすれた声で歌うのを、聴き手も涙しながら受け入れる、というように。表情豊かな顔のピアニストは、そういえば日本人に多いような・・・。その辺りのバランスは国や個々のメンタリティーによって違うかもしれません。

さて、演奏者にとって陶酔の危険度ナンバー1 はラフマニノフのピアノ協奏曲でしょう。
この曲は感傷的で美しすぎるので、自分の世界に入り込み、つい周りが見えなくなりがちです。
最も有名な第 2 番は、ギュッと胸を締め付けられる旋律がたまらなく、感情移入が進みがちです。
ただし音が多いため、陶酔しすぎると数え間違う、オーケストラとずれる、などヒヤッとする危険が隣り合わせです。
ある指揮の先生によると、第 3 番はさらにソリストに理性が必要な曲、とのこと。すさまじい感情の大きな渦に巻き込まれ、聴いている方は理性を失いそうな曲ですが・・・。この曲のソリストがすごい顔をしているとしたら、大変な真剣勝負だからでしょう。

というわけで、ピアニストは演奏中いろんな表情をしていますが、そのほとんどは陶酔ではなく集中するからあのような顔をしていると思われます。
ちなみに、自分の演奏時の顔は・・・怖いのでビデオは直視できません。

丸山美由紀（ピアニスト、糸魚川市在住）